

お知らせの^{まなざ}眼差しに浮かぶ家族 —現実生活への響きを求めて—

白石淳平(第1部所員)

はじめに

この度、紀要『金光教学』第52号に、「「申し渡しの覚」登場背景に浮かぶ家族—お知らせの反復に注目して—」と題した論文を発表させて頂きました。本日は、その紀要論文に発表させて頂いた研究の内容に関わって、研究に取り組む上で思わされたこと、考えたこととお話しさせて頂きます。

そのあらましを紹介しておきますと、タイトルにもありますように、この論文では、「申し渡しの覚」という資料に注目しました。

これは、明治六年に神からの指示を受けて金光大神が記したと考えられる書付なのですが、ご覧の通りそこには、家族の日常の暮らしに関わる事柄が記されています。

さて、何故この「申し渡しの覚」に関心をもったかと言いますと、「覚帳」を見ておられますと、この書付が記されることになる明治六年へ至る過程には、金光大神家族へ向けた神からのお知らせが繰り返

一、申し渡しの覚(前半部)
 とは、とめ申さず候。諸けいこの
 く、書き読み、そろばん、身の書
 ために、なること、考えていたし候
 え。身の、ためにならんことは、せん
 がよし。商売のこと、よそへ行くの、出
 の、誰行けの、とは言うな。誰一人
 もよそへはやらんのだ。仲よろしい
 たせい。人の喜ぶことはいたしてよ
 した。おいおい縁談のこと、神が指
 いたす。衣装、諸道具一切、少々の
 物は、時々、買うがよし。何があつて
 も、いらぬ時節がくるぞ。誰が身の
 上に、でもあるぞ。何事でも神のこ
 と忘れな。神を頼め。悪きことは神
 は言わん。(以下略)

これは、明治六年に神からの指示を受けて金光大神が記したと考えられる書付なのですが、ご覧の通りそこには、家族の日常の暮らしに関わる事柄が記されています。

さて、何故この「申し渡しの覚」に関心をもったかと言いますと、「覚帳」を見ておられますと、この書付が記されることになる明治六年へ至る過程には、金光大神家族へ向けた神からのお知らせが繰り返

返し記されていて、しかもそのお知らせの内容や構成には、明らかに、「申し渡しの覚」との関連性が窺えるのであります。

そこで、実際に書付が家族へ申し渡されるに至る過程として「覚帳」を見ていくことで、その過程に、神からのお知らせと家族の生活との関連が窺えるのではないか、と思ったわけです。

また、明治元年に、金光大神家族の一人一人へ向けて、それぞれ神号が与えられていたことはよく知られていることですが、この神号の付与が、家族へ向けてお知らせが繰り返されていく時期に重なっていることも、「申し渡しの覚」の登場背景に関わる重要な注目点となりました。

そして、改めて「覚帳」を読み解く中で浮かび上がってきたのが、お知らせによる家族の問題化、すなわち、お知らせというかたちで、神の眼差しに捉えられた「家族」から、逆に、金光大神と家族の現実が照らし出されていく、という様相だったわけです。

実は、この「逆に」というところが、この度の研究へと向かっていく関心・問題意識に深く関わっております。

そこで、考察内容の紹介に行く前に、研究の一步手前のところで、私が思わせられ考えさせられていることから、お話しさせていただければと思います。

問題関心について —研究の一步手前のところで—

(1)「何もあるのではない」

★娘の視界に浮かぶ家族一生み出す／生み出される家族と〈わたし〉の“ありか”一

まず自己紹介もかねて、私の家族について少しお話しします。今私は研究所に御用を頂き、この御霊地に、妻と娘の3人家族で暮らしているのですが、今妻のお腹には新しい命が宿っておりまして、正確には、4人の命を寄せ合って、私たちはここに生きています。

結婚して自分の家庭というものを持って丸4年が経とうとしています。結婚当初、自分自身の家庭を築いていこうと、「生み出す」構えになったとき改めて気付かされるのは、自分自身がこれまで生み出されてきた、そして生み出されているという、家族を介しての〈わたし〉や世界の生み出され方です。

2歳半になる娘は、最近本当によく喋るようになりました。身重である妻の体調の事もあって、娘と2人だけで過ごす時間が増えたからそう思うのかも知れませんが、母親に甘える時間が減ったことで、それが私に向いているのかもしれない。しかし、どうも娘が言葉でもって探っているのは、自分の下にもう一人子供が生まれてくることで変化する家族関係の中での、自分という存在の“ありか”のように思えるのであります。

そうしてみると、「今日わたしはね〜」とか、「わたしは何々が好きなの」とかいう、いわゆる「自分語り」が増えてきたことが思いあたります。娘は娘なりに、新しい家族という関係における新しい自分の誕生を意識しているのかもしれない。そこで気付かされるのは、法的な手続きによって婚姻が成立し、戸籍が新たに作られるという、社会制度に規定された家族というものが、あらかじめ「ある」ことになっているようだけれども、実はそうでないのだ、ということです。子供が誕生することによって、またその子供との関係によって、私たち夫婦もまた父、母として誕生しているのであって、そのような関係の作用の中で家族がつつねに生み出され、またそれに伴ってそれぞれの〈わたし〉が更新されつつ生み出されてきている、ということをおぼろげに思われるわけです。

★揺さぶられる現実の自明性―「構え」の問題へ―

このようなことを思う時、かつて高橋正雄先生がその御著書の中で、家庭・家族というものについて、「何もあるのではない」と語っていたことが想起されます。また、春のご大祭時に刊行された冊子、『神人』の第一集は、皆様既にご覧になったことと思います。この冊子に、「良い仲は生み出される」というお話が掲載されているのですが、実はその中でも、「何もあるのではない」という言葉が、お取次の言葉として出て来ます。



これは、認知症を患った奥様に向き合われていく、ある教会の先生のお話なのですが、そこには、奥様の記憶の退行や、それによる生活の支障に直面する中で、何か“こうあるべきだ”とか、“こうあるはずだ”といった人間心を取り外したところで、奥様の存在そのものの神秘に出逢い直されていく先生の姿が語られています。またそこでは、改めて御夫婦の歴史が辿り直されてもいくのです

が、夫婦生活の始まりに関わって回想された、結婚に臨むにあたっての師匠へのお取次の際に色紙に書き下げられていたのが、「何もあつたのでない」という言葉だったわけです。この言葉が、高橋正雄師に由来するものかどうかは、さだかではありません。しかし、おそらく師匠はその時、お取次の場で、家族、夫婦といったものを、あらかじめ「ある」とする人間の既成観念で捉えようとするのを戒めつつ、これから生み出し、そして生み出されていくありようへ向けた、信心の眼差し、構えを促すために、「何もあつたのでない」と書き下げたのだと思われます。

何より、認知症の奥様に向き合う中で、今まさに眼前に奥様の存在が「ある」ということ、そして今まで「あつた」という、現実そのものの神秘に、驚きさえ伴って出逢い直されていく先生が、その「今」に至る起源として師匠のお取次を頂き直しているところに、「何もあつたのでない」という言葉の、より深い実感が湛えられているのではないのでしょうか。そして、この、「何もあつたのではない」という、現実の事態への「構え」の問題が、先ほど申しました、「逆に」の問題へもつながっているように思うわけです。

(2)お知らせの眼差しへ

★改めて、「現実」って？

現実への構え、眼差しと申しました。冊子『神人』の内容に関わっては、信心の構え、とも表現しました。つまり、この、「構え」「眼差し」といった、現実への向き合い方に関わる問題が、信心に深く関係しているのではないかと、そのような思いが、私自身の問題関心としてあるわけです。

そこで改めて、「現実」って、一体どういうことなんだろう、と思うわけです。言うまでもなくその「現実」とは、今我々の目の前にある、この「現実」ですから、我々はすでに、目で見、耳で聞き、また匂いや肌で感じることによって、「現実」を「現実」として感じていますね。しかし、実はそれがすべてではないことも、私たちは知っているはずなんです。というのも、あらかじめ知っている、あるいは「ある」と分かっていたはずの「現実」を、それとは違った見え方へと誘ってくれる仕掛けが、この世界には色々と用意されているからです。

★ファンタジーにおける現実／異界の関係

例えばその一つに、ファンタジーというものがあります。聞いたことがある方も多いのではないかと思います。『ハリーポッター』や『指輪物語』が映画化もされ人気を博したことは記憶に新しいですし、エンデの『モモ』やキャロルの『不思議の国のアリス』は、児童文学の古典にさえなりつつあります。



さて、ご存じの通り、そういったファンタジーの世界では、魔法や妖精、ドラゴンといった、我々の現実にはあり得ないこと、ものが描かれます。しかしおとぎ話と少し違って、ファンタジーには、そのあり得ないこと、ものに対して驚きをもって出逢わされる、現実を生きる普通の人間の視線が描き込まれることがあるんです。

『ウサギとカメ』や『蟻とキリギリス』で、動物や虫が人間の言葉を話しても、もちろん驚きませんね。おとぎ話なので。しかし、ファンタジーでは、人語を話す動物に驚き、魔法の力に目を丸くする、といった過程が経られることが多いわけです。つまり多くのファンタジーには、現実と非現実の両方が同時に描かれていて、その落差が印象付けられているわけです。それは、物語上の別世界、つまり非現実を際立たせることによって、読者にリアルなイメージを提供するという、文学のテクニクに関わるものです。しかしではなぜ、そのような物語が次々と書かれ、そして広く読まれるのでしょうか。



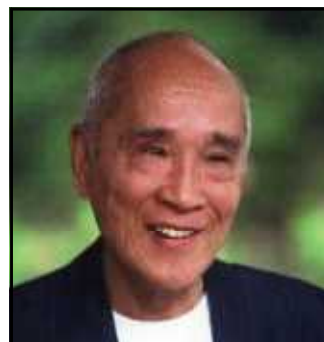
★物語上の別世界が照らす現実世界の奥行き



ミヒャエル・エンデ(作家)
(1929～1995)
主な作品：『モモ』
『はてしない物語』

ファンタジー作家であるエンデ氏は、「この世界なり、自然なり、宇宙なりが、すべて人間の五感でとらえうるものだけからできているとは、どうしても信じがたいのです」と語っています。また詩人の谷川俊太郎氏は、「ファンタジイは現実の組みかえによって、より深い真実に達しようとする試みだ。それは現実の異化であって、現実の無化、ないしは夢化ではないのである」と言っています。

つまり、多くのファンタジー文学は、物語上の別世界に照らされるかたちで、今日の前にある現実世界の豊かさに出逢い直して欲しいという、読者への願いに支えられているわけです。そして、それゆえに、その物語を生み出す当の作者は、目に見える、人間に分かりうる範囲を超えて、現実世界を深く広く捉えようとする眼差し・構えから言葉を紡いでいくのであろう、と想像されるのであります。



谷川俊太郎(詩人)
(1931～)
主な詩集：『二十億光年の孤独』他

★「向こう側」から開かれる現実の意味—「読み」の問題へ—

さて、目に見えない世界に照らされることによって現実の世界が開かれるという、このようなありかた、何かに似てはいないでしょうか？そうです、ご想像の通り、私は、この点に、神様への信心に近いものを感じるわけでありまして、この度の研究に向かう手前には、信心に関わるこういった感触があるわけです。

では、それが何故、教学研究の課題として問われなければならないのでしょうか。

というのも、家族の日常やファンタジー小説を例にとって見てきたような、現実に対する構え(直し)から開かれてくる信心の世界のありようは、実は既にして皆様が感じておられるところでもあろうかと思うんです。つまり、信心とは本来そういうものだ、という“当たり前のこと”かもしれないわけです。しかし、当たり前が当たり前でないこと、「何もあるのではない」ということへの気づきを促してくれるのが信心であるとしたら、その“信心の「当たり前」”にも、改めて用心する必要があるんじゃないだろうか、とも思うのです。

そしてこのことが、教学研究との関わりで問題になってくるのが、「覚帳」や「覚書」、そして、お知らせへの向き合い方、つまり、「読み」の問題です。

では、どう問題なのでしょう。「読み」ということは、書かれてある言葉を読むわけですから、当然、分かるように読もうとすることになります。しかしここには、先に申しました「構え」の問題が潜んでいます。つまり、言葉として記された「覚帳」や「覚書」、特にお知らせを目の前にして、私たちはあらかじめ分かっていること、知っていることを前提として、読もうとしてはいなかったらどうか、ということなのです。

★「現実」へ向けたお知らせの意味とは？

何故それが問題なのでしょう。それは、お知らせというものの性質に関わります。言うまでもなくお知らせは、神様が人間に対して何かを知らせるものです。ここで注意しなければならないのは、お知らせが、人間の現実へ向けて、何かを知らせようとしているという点です。つまり、お知らせがあってはじめて、現実事態への視界が開かれるという側面が重要なわけです。

もちろん、お知らせを受ける金光大神が、現実を見ていなかったわけではありません。しかしお知らせは、人間が知っているはずの現実へ向けて、何かを知らせようとしてくるわけです。いやむしろ、知っているからこそ、人間が分かりうる範囲を超えたその現実の意味の深さ、広さへの気づきを促しているのが、お知らせなのではないでしょうか。

★お知らせの眼差し—信心の世界の「広がり」を求めて—

私たちは、あらかじめ金光大神の人物像やその人生をなんとなく知っています。それゆえに、言葉で記されたお知らせの内容を、そのまま、現実に対する金光大神の認識として読もうとします。しかしそれでは、お知らせに触れることによって、金光大神にとっての現実にどのように意味の開け、広がりが生じたのか、あるいは、金光大神がそのお知らせを、現実においてどのように受け止めることになったのか、という問題が置いて行かれることになりはしないでしょうか。

おそらく金光大神は、一つ一つのお知らせに、そしてそれによって知らされていく現実の意味に、驚き、戸惑っていたはずで、でなければ、ここまでのご手記を残すことになったでしょうか。一方、私たちが金光大神のご手記、その中でも特にお知らせに向き合うとき、どれほどの驚きをもって出逢うことになっているのでしょうか。

お道の信心は、「金光大神の信心」を求め、現すことであるとも言われます。しかし「金光大神の」という時すでに、金光大神という一人の人格の問題のみにあずけるかたちで、私たち自身に分かり得る範囲に、その信心の世界、神様の世界を封じ込めることになってはいないでしょうか。このように、「読み」の問題は、書かれてある言葉の意味の問題を超えて、信心の世界、神様の世界への向き合い方の問題に深く関わっているように思うわけです。

以上のことは、「感じる」というかたちで日頃私たちが出逢っているはずの現実の開け、広がりといった信心の世界が、教典等の「読み」のところでは、「知る」「学ぶ」といった、人間の了解範囲内でのことに縛られているのではないかと、そしてそのようなあり方が、実際の日常の信心のあり方へも影響しているのではないかと、私自身への自戒でもあるわけです。

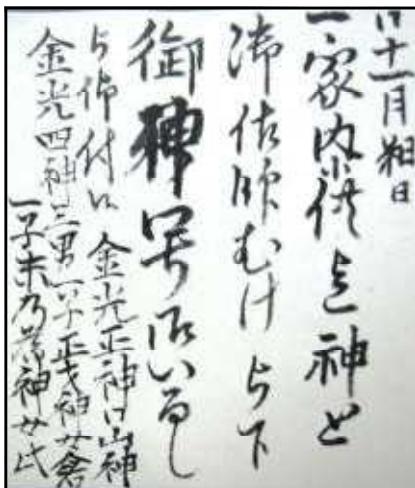
以上ここまで、研究の一手手前の問題関心についてお話してきました。やや駆け足になりますが、残りの時間を使って、この度の研究の内容を少しく紹介していきます。

研究の内容から

(1) 家族への神号付与とお知らせの「反復」

● 神号が付与されるということ

さて、「申し渡しの覚」の登場に至る過程には、暮らしに関わるお知らせが繰り返されていくわけですが、それに先立って、金光大神家族は神から神号を与えられていました。明治元年のことです。写真をご覧ください。



「神号」という文字のインパクトに驚きます。まるで、家族を包み込むかのような「神号」の文字は、家族へ神号が与えられたという出来事、そしてその「ことの重大さ」への、金光大神の「感度」を考えさせます。

つまり、神号それ自体の意味ではなく、神号が付与されちゃった、という出来事の意味の問題です。それまで自明であった現実の家族が神から眼差されていた、そのことへの気付きが、家族の現実に対して金光大神にいかなる構えをとらせていくのだろうか、ということなのです。

●家族の二重化

①【明治四年八月四日：「覚帳」15-8】

八月四日仰せつけられ。

一つ、麦買うことすな。此方のありたけに食べ。子供に唐臼ふませいでよし。家内中に米を食べさす。手習い、本読み、そろばん、しだいに、した者から教え。

②【明治四年十二月四日～十日：「覚帳」15-11～12】

同じく十二月四日仰せつけられ候。

一つ、始終仕合わせ。何事も苦世話にすな。実意いたし。きょうといことも、こわいこともなし。どのようなことあっても逃げることなし。何事も人に頼むと言うな。

娘縁のこと、たとえ三十になりても、いかず後家と言われても、苦しゅうなし。人の言うこと苦世話にすな。めいめいの考え。神は先を楽しみます。寿命長久、末繁盛頼み。

同じく十日早朝仰せつけられ。

一つ、金光大神社でき、何事も神の理解承り、承服いたせば安心になり、神仏とも喜ばれ。親大切、夫婦仲ように、内輪むつまじゅういたし候。

③【明治五年一月二十五日：「覚帳」16-1】

壬申正月二十五日、子供縁談のこと、一人もよそへはやらんと、きょう言い切り。何事も法どおりにさせず、神の指図いたし。

さて、明治元年における神号付与からしばらくして、暮らしの事柄に関わって、左のように繰り返しお知らせが示されています。

細かい内容もさることながら、先に見た「神号」のインパクトから見ていくとき、これらお知らせの「受け止め」には、神の眼差しに浮かんでくる「家族」と現実の家族との違い、つまり「二重性」への戸惑いが伴っていたのではないかと考えさせられます。

すなわち、家族の暮らしに関わって繰り返されるこれらお知らせの「受け止め」は、それまで自明であった家族に改めて向き合い直していくことであり、それは、神号付与という出来事の意味を、具体的な暮らしにおいて繰り返し問われていくことを意味したのではないかと考えられるのです。

●現実の「亀裂」と神の確かさ

【明治五年十二月十五日：「覚帳」16-26～27】

同じく十五日仰せつけられ。なんにも氏子供え物でよし。

一つ、もちつき、正月かざり、いらす。年ぶん注連あり。幟、内へみな立て。祝い、祭り、人なみにするにおよばず。食べることはなになりともこしらえて食べい。

一つ、たいこ打つにおよばず。

一つ、新正月十五日が十七日に当たり、申十二月。十七日には門の鳥居とり納めおき。

一つ、買い物、見ず知らずの物買うな。

一つ、魚たりとも、入用なら、十匁の物二十目でも買え。値切ることすな。

一つ、生きたる物、いかい飼うな。骨がおれる。

一つ、衣類、諸事の物、むたいに買うな。買うてよき物は神が買うてやる。

一つ、物見聴聞のこと、むたいにとび出な。時の見合わせでまいり。世間の人は命延ばしと申し、出。

一つ、此方には神がおるから、命延ばしにはおよばずこと。

金光大神社、一子大神親夫婦、子供、正神、山神、四神、正才神、末為神とまで五人、神に用いてやり。妻常住かせひきと申し。このうえ神の言うとおりにせねば、病氣、病難、はやり病氣まであるぞ。壬申十二月十五日。

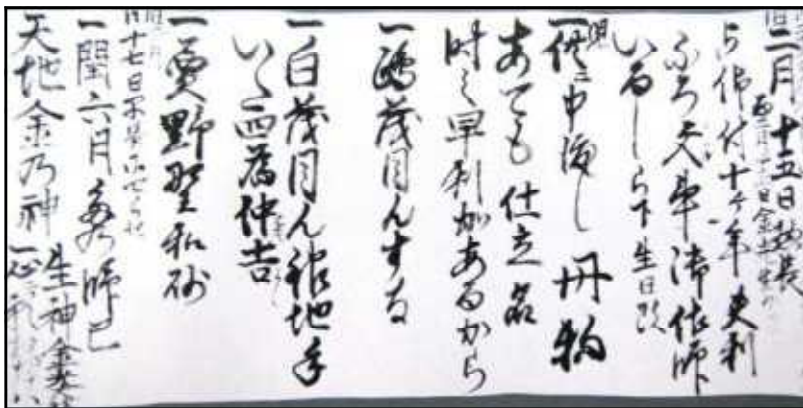
その後、「家族」への神号を再び伴って示された上記のお知らせは、現実の暮らしへ向けてその「二重性」が刻まれた、問題の深刻さを感じさせるものとなっています。

先に見たお知らせの「反復」(①～③)には、明治元年における神号の付与と、家族の現実への構え直しとの連関性が浮かんでいました。その上でなおさらに神号が示されるこのお知らせは、お知らせと現実のレベル差を決定的にすることとして、家族の「二重性」をより強く金光大神に意識させたと考えられます。それは、実生活に対する家族の不安に追い討ちをかけるような、現実の「亀裂」とさえ見えてきます。しかし、だからこそ、そのレベル差を越えて家族へと眼差しを注ぐ神の確かさも、ここにあるわけです。

以上のように見ていくと、神号の付与、そしてお知らせの「反復」が、家族がまさに家族として現実に生きて在る意味を問われる事態として浮かび上がってきます。もちろんそこには、お知らせに対する戸惑いとして、家族の自明性が揺らぐことへの逡巡も生じていたと考えられます。その逡巡が、実は、家族という事柄を超えて、現実上の人間生活全体に広がる「異化」の問題、つまり、新たな現実の意味を開く信心の構えの問題へも通じているのではないだろうか、と思われるわけであります。

(2)生活を営むことへ向けて

●木綿という迫り



さて、明治五年の神号の再明示を経て、その後もなお暮らしに関わってお知らせが繰り返されていきます。それは、「木綿」という“物”に関わるお知らせでした。写真をご覧ください。

「丹物」という表記のインパクト

は、明治元年の「神号」で見た、「感度」の問題を想起させます。また、「～するな」という命令形は、神の眼差しの厳しさ、そして、その「受け止め」における現実の「亀裂」の深さを感じさせます。このことから、神号付与の意味が具体的な暮らしの問題へと投げかけられる必然性を考えさせられるのです。

これに先立つ右のお知らせでは、「神職立たん」という、生活確保に関わる問題が浮上していました。それは、生計という實際生活に神の眼差しが注がれていることのあらわれでもあります。さらに、「天地乃神とは」という名乗り出が、その眼差しの強さを意識させます。つまり、「丹物」という表記は、神号付与の意味を、さらに具体的な暮らしの営みに強く問われていることへの、「感度」の現れとして見えてくるわけです。

【明治六年一月二十日：「覚帳」17-1】

新二月十七日、旧曆西明治六正月二十日早朝仰せつけられ候。小田県の触書のこと聞き、**神職立たん**と、家内、子供まで心配仕り候。

天地乃神とは、日天四 月天四 丑寅未申鬼門金乃神のこと。神のこと家内中忘れな。人を頼むことすな。良し悪しし、神任せにいたせい。心配すな。世は変わりもの、五年の辛抱いたし。とにかく、内輪きげんよういたし。もの言いでも、あなたこなたと申してよし。何事もあだ口申すな。

●「木綿」に関わるお知らせの「反復」

- ①【明治六年二月十五日：「覚帳」17-4-2~5】
(*前頁掲載写真に対応)
一つ、子供に申し渡し。反物あっても仕立てな、時の
はやりがあるから。
一つ、しま木綿すな。
一つ、白木綿吟じていたし、ためおきよし。
一つ、**売り布はすな**。
- ②【明治六年五月二十七日：「覚帳」17-17】
同じく二十七日お知らせ。家内中木綿着いたし候。
木綿一反も売るな。
- ③【明治六年八月十七日：「覚帳」17-24】
一つ、申し渡し。娘子木綿着いたし。間では、売り木
綿、使い料同行同様にいたせい。**此方買い取りにい
たす**。代をもってめいめいのいる物買い、または染
め賃にいたし候。綿、此方やり。麦米買うにおよば
ず。八月十七日お知らせ。

さて、木綿に関わるお知らせです
が、実はこのとき、金光大神は広前
を退くことになっていました。いわゆる、「神前撤去」です。

残りのお知らせを併せて見ていく
と、一貫して、木綿を売りに出すこと
を禁じています。しかし、「此方買い
取りにいたす」とあるように、神が買
い受けることが保障されます。それ
は、旧来の社会慣行からすれば、逸
脱とも捉えられるかもしれませんが。し
かし、神勤営為に密接に関わること
として日常の具体的な営みが捉え

直されることで、自明な現実が実感を伴って「異化」されることが促されていくわけです。また
そこには、神の意向の深さ、あるいは、どこまでも家族を掴んで放さない神の“執拗さ”さえ感じ
られます。それは、不安の只中でなお繰り返し知らされていくこととして、神の確かさへ気付い
ていく積極的な契機ともなったでしょう。しかし、やはり現実とお知らせとの隔たりは依然残さ
れたままと言えます。その隔たりが意識されつつ、そこからさらに、現実の社会関係へ向け
て、新たに家族を構え直していくことに関わって示されるのが、「申し渡しの覚」に関わるお知
らせです。

(3)「申し渡しの覚」

●「書付」の申し渡しへ…

このようなお知らせが示されます。日付が「申し渡
しの覚」のものと一致しています。

【明治六年十二月十日：「覚帳」17-32-3】
一つ、諸けいこ、子供、**なにか決まりかた
の書付**いたし、申し渡し候。家内、子供中。
癸酉旧十二月十日仰せつけられ候。

申し渡しの覚(全文)

一つ、申し渡しの覚。諸けいこのことは、と
め申さず候。中にも、字書く、書き読み、
そろばん、身の上のためになること、考え
ていたし候え。身のためにならんことは、
せんがよし。

商売のことと、よそへ行くの、出るの、誰
行けの、とは言うな。誰一人もよそへは
らんのだ。仲ようにいたせい。人の喜ぶこ
とはいたしてよし。おいおい縁談のことも
神が指図いたす。衣装、諸道具一切、少々
の物は時々買うがよし。何があつても、
いらぬ時節がくるぞ。誰が身の上にも
あるぞ。何事でも神のこと忘れな。神を
頼め。悪きことは神は言わん。

男はなりたき家のため、みんなの身の上
のためになることいたすようにせい。女は
なりたきに白の木綿いたし、ためおけ。女
のつむり道具にもなり、衣装にも金にも
田地にも、なんなりともぞみしだいに神
が時の考えでしてやる。なんぼう氏が
利口発明でも、病氣、難があたるときに
は、いけぬぞ。欲のこと言うな。気をせ
く、な、氣みじかに言うな。短氣は損氣とい
うことあり。

五人の子に宮建て、みなそれそれに、総氏
子を助ける守り役を申しつけるぞ。先を
樂しみ。どこにはどう、あそこにはこうと、
よそのことは言うな。何事も世間のお
りにはならんぞ。お上ご変革に相成り候。
お上どおり。神の言うとおりに、実意丁
寧にいたし候え。真の心、誰にてもひと口
も嘘を言うな。言うとおりに聞かねば、め
めいの難儀、神が残念に思うだけ。家中、
子供中。

取次生神金光大神 天地金乃神
明治六年癸酉十二月十日
新、七甲戌一月二十七日にあたり。

つまり、ここでの、「なにか決まりかたの書付」が、「申し渡しの覚」であると考えられるわけです。見ての通り、ここまで見てきたお知らせと明らかに関連しているその内容からは、書付の申し渡しにあたって、それまでのお知らせを辿り直している金光大神の姿が想像されます。

さらに全体を見ていきますと、厳しい語調はそのままに、しかしお知らせが改めて捉え直されたようにも見えます。ここには、神による家族の問題化が、より具体的な行為に働きかけるかたちで確かめられようとしていることが窺えます。それは、「今、ここ」という現実、そしてその先へ向かって、お知らせが受け止められていくありようとして捉えられるのではないのでしょうか。

●現実の深み、そして先へ向けて

そのような未来への意識は、それ自体が家族の結束への「願い」ともなります。つまり、「申し渡しの覚」は、先へ向かって生きていくという、人間の生の動きへと、お知らせの「受け止め」が具体化されるありようを窺わせるのです。このように、日々の暮らしを「生きていく」という具体的な行為の問題は、未来と現在を仲立ちするかたちで、「今、ここ」という眼前の現実の意味を問うてきます。それは、神が知らせる世界との距離に生きざるを得ない人間の、そのままの現実が、先への「願い」を生み出していく「今」として開かれていくことを意味するのではないのでしょうか。

その意味で、家族への神号付与は、現実の社会へ向けて家族に出逢い直し、そして新たに生み出していく「構え」への促しであった、とも考えられるのであります。そして、このような「申し渡しの覚」の意義を「覚帳」におけるお知らせの「反復」へと改めて振り向けてみたとき、ここまで見てきた過程には、現実における人間の生を先へ向けて支えて在る、神そのものの在りようが、確かなものとして感じられてくるのであります。

●後日談として…

最後に、こちらの伝承資料をご覧ください。

【研究資料「金光大神事蹟集」185、安部菊恵の伝え】

教祖様が、神様のお知らせで、「今日から、もう白木綿にせえ。」いうておっしゃって、それで、それまで母(古川この)が色物や柄物を織りょうたんですが、お言葉通りそれを一切止めて、白木綿を織らしてもろうたいうて、母から聞いとります。糸を紡ぐと眠たくなるから、お母さん(一子大神)やお姉さん(くら)に糸を紡がして、自分は一生懸命に織った、一日に二反ぐらい織りょうたんでえ、いうてな。唐びつ一杯織ったという。それが、教祖様が亡くなられたときに、しのび草に紋付きにせられ、せえから後は、旧広前が御新築になる時に、御神前を全部それでまいて、お役に立ったんでえ、いうて母が言ようられた。

お知らせが届けられた「その時」の現実の意味は、ずっと時間を経てなお、証され続けていきます。これも一つの、「願い」の成就のありかたとして、神との関係を生きていくということの意味を、我々に問いかけていると思われるのであります。

おわりに

見てきたように、「申し渡しの覚」と「覚帳」のお知らせとの関係上には、お知らせの「受け止め」における現実への構え直しと、それを繰り返し促そうと働きかける神の眼差しが浮かび上がってきます。そして、その眼差しが向かうのは、他ならぬ「その人」が生きていくことでした。

「覚帳」は、人間の生へと向けられて在るそのような神の眼差しと、その眼差しに促されて開かれるべき現実への視界を、金光大神を介して、我々の「今」へと伝えるものではないでしょうか。このように「覚帳」に向き合うことから、今の時代だからこそ、「現実」へ向けられた神の「願い」の響きを、日常の営みの一つ一つに聴いていくことが求められているのではないかと、思わされてくるのであります。

以上、この度は「申し渡しの覚」との関係から「覚帳」を見てきたのですが、最後に、この取り組みを通して浮かんできた新たな関心について、少しく触れておきたいと思います。それは、「生神金光大神」への関心です。

見てきたように、「覚帳」には、家族という事柄を介して、信心の構えの問題が浮かび上がることになっていました。このことから、「生神金光大神」が神のお知らせによって示されるという事態には、一人金光大神という人格の問題のみに限られない、意味の広がり秘められているのではないかと、予測させられるのです。何故なら、この度見てきた「覚帳」の様相、つまり、家族という事柄を介して指し示された、人間生活全体にまで広がる「異化」の問題からは、そこに社会や人々との「関係」の問題が伴っていたことが示唆されるからです。

このことからさらに、「生神金光大神」に先立って記されていた、「わが身の姿を見よ」というお知らせとの関連性も気になってきます。というのも、「見よ」と促された「我が身の姿」とは、社会や人々との「関係」において「見られ」「眼差される」ものでもあり、そこには、現実世界における諸関係へ向けた視界の開かれが同時に促されていたのではないかと、とも予想されてくるからです。

このように、「覚帳」には、〈わたし〉の「助かり」へ向けて語られる「信心」が、「人間の助かり」として「助け」の問題へと展開していく、その“広がり”への手がかりが、我々の現実へと読み出されるのを待ちつつ、今なお秘められているように思うのです。

〈終〉